

【実践報告】

教職実践演習（中・高）の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 笹原 豊 造

0 まえがき

本学に教育学部が設置され4年目であり、今年度が教職実践演習（中等教育）の初年度となる。

教職実践演習（中等教育）は教育実践に関する科目である。グローバル化や情報化、少子高齢化など急激に変化する21世紀社会に対応するために、学校教育においても高度化・複雑化する諸課題への対応力が必要である。このような21世紀を生き抜くための力を育成するために、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力の育成等を実践できる教員とは何かを確認する。

1 本演習の方針

「使命感や責任感、教育的愛情等」「社会性や対人関係能力」「生徒や学級経営等の理解」「教科内容等の指導力」の向上を実現するために、学内外関係機関と連携し、教育の専門性に関する最新の知識技能の理解、生徒・保護者・教職理解、人間性及び教育の実践的指導力の涵養を、演習（ロールプレイを含む）、模擬授業及び実地調査（フィールドワーク）などを通して実施する。

担当教員が中心となって授業は展開するが、専門性が問われる教科指導の部分に関しては、教科専門の教員の協力体制を組むほか、教育委員会や中学・高校教育の現場体験を持つ教員の協力体制を組む。国語科では、教育学部・猪川准教授、岡教授、ICT教育および学級経営では教職センター特任講師・小川雅史先生、保護者対応及び道徳教育では教育学部・白石教授が担当した。特別支援教育については、外部講師に依頼した。

2 到達目標 以下の事についての知見や態度を高める。

回	月 日 曜日	テーマおよび内容	担当教員
1	9.27 火	ガイダンス ・教職実践演習の意義、今後の日程、グループ分けなど	笹原
2	10.04 火	特別支援教育Ⅰ～幼児と低学年児童の場合～ ・初等教育と合同で聴講 レポート提出	古田 (外部講師)
3	10.15 土	特別支援教育Ⅱ～高学年と中学生の場合～ ・初等教育と合同で聴講 レポート提出	古田 (外部講師)
4	10.25 火 教室：252	ICT教育のあり方（1） ・ICT教育の理念、ICT教育を実りあるものにするための基礎的なスキル	小川
5	11.1 火 教室：252	ICT教育のあり方（2） ・ICTを活用した授業案の発表	小川

6	11. 8 火	模擬授業（1） 英語科の第1グループが模擬授業 ・英語科担当グループで授業を考え、代表者が授業を行う。 ・授業のねらいなどの説明後、質疑応答	笹原
7	11.15 火	模擬授業（2） 国語科の第1グループが模擬授業 ・国語科担当グループで授業を考え、代表者が授業を行う。 ・授業のねらいなどの説明後、質疑応答	猪川，岡
8	11.22 火	模擬授業（3） 英語科の第2グループが模擬授業	笹原
9	11.29 火	模擬授業（4） 国語科の第2グループが模擬授業	猪川，岡
10	12. 6 火	保護者との連携・協力を目指して ・保護者対応、保護者との連携・協力のあり方を具体的事例を通してのワークショップ	白石
11	12.13 火	学級経営のワークショップ（1） ・教師としての心構え、赴任までの準備など	小川，笹原
12	12.20 火	学級経営のワークショップ（2） ・学級開きを想定して、学級通信の作成・発表	笹原
13	1.10 火	道徳教育の理解 ・道徳の指導案を考え、発表	白石
14	1.17 火	日本の教育が直面する課題 ・日本の教育が直面する課題について考える。	笹原
15	1.24 火	まとめ「私の目指すべき教師像」 ・これまでの学修を振り返って、自らの目指すべき教師像をまとめ、発表	

注）特別支援教育Ⅱは、古田講師が体調不良のため休講となった。2023年2月7日に、兼柁講師を招き補講を行った。

3 演習のねらいと実際

（1）ガイダンス 本演習の日程とその意義

教職実践演習は「教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成し、その確認を行うための総合実践」として位置づけられる。この演習では、「教員として求められる4つの事項として、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 ②社会性や対人関係能力に関する事項 ③幼児児童生徒理解に関する事項 ④教科等の指導力に関する事項）」について研修を深めることを目的とする。この目的を達成するために、「演習（指導案の作成や模擬授業・場面指導の実施等）や事例研究、グループ討議等を適切に組み合わせて実施することや、教職経験者を含めた複数の教員の協力方式により実施すること」などを説明した。

（2）特別支援教育

① 特別支援教育Ⅰ～幼児と低学年児童の場合～レポート提出

○学生のレポートより

講義を受けて、最も印象に残ったことは、自閉症をもつ児童生徒への具体的な対応例だ。自閉症の特性として、字義通りに解釈することや、見通しがもてないことへの不安感が挙げられていた。字義通りに解釈することに関して例で挙げられていたものは、肯定的に伝えるということだ。学校にある危険な場所のことを「～いけません」と否定的に書くのではなく、「～しないのが安全です」と書く

ことで、改善されたようだ。確かに、否定的に書かれると怒られているように感じるため、インクルーシブな教育を行う上で非常に有効だと思った。見通しがもてるようにするために、スケジュールを視覚的に写真を用いるなどして具体的に伝えることが実践例の写真とともに挙げられていた。

② 特別支援教育Ⅱ～高学年と中学生の場合～レポート提出

○学生のレポートより

講義を聞いて、印象に残ったことは、兼榊先生がおっしゃっていた、発達障害の子どもたちにとって、「驚き」は「怒り」になり得るということだ。感受性が豊かでこだわりが強いということは、安定性を求めているからであると講義で学び、不意の出来事が起こったときには不安な気持ちになることは誰もがあると思うため、できるだけ細かく見通しを伝えていこうと感じた。4月から教員として学校で様々な子どもたちに出会うと思う。その時に、今日学んだことを踏まえて授業を行う際には、単元の計画や目標を導入部分で伝えることや、一日や一週間の予定を明確に伝えることを心掛け、どのような子どもたちにも安心して過ごしてもらえるような指導を積極的に行うことができるよう、努力していきたい。

(3) ICT教育のあり方

① 「ICT活用のメリットデメリット」

教育の情報化に関する手引き-追補版-(文部科学省2020年6月)では、教育の情報化について大きく4つの柱が示された。まず一つ目は子どもたちの情報活用能力の育成について。二つ目はプログラミング教育の推進について。三つ目は教科等の指導におけるICTの活用について。四つ目が校務の情報化の推進についてである。これらの柱をもとに、初等教育で学ぶ内容を確認し、中等教育におけるICT活用教育の実践例を学修した。子どもたちの情報活用能力を育成するには、教師自身の活用能力の向上が必要であることを理解し、卒業までの学修すべき内容について取り上げた。また、校務の情報化については具体的な演習を通して学修し、学校で扱う情報を保護するために、暗号化や情報セキュリティの重要性について、実践を通して学修した。

② 「オンライン授業」

当初3年間をかけて段階的に進める計画であったGIGAスクール構想が、整備計画を前倒して1年間で整備が進められた。これは、義務教育学校の児童生徒一人に一台の端末とネットワークを整備し、コロナ禍においても学びを継続させることを目的として進められた施策である。オンライン授業は、伝染性疾患の流行や災害時にも学びを継続できる利点があり、広く普及した。オンライン授業を実施する際の注意事項及び課題、必要なICT機器、その活用のための基本的なスキルについて学修した。具体的には、アカウントやドメインといったオンライン授業を運営する際に必要となる基礎的な知識を身に付け、オンライン授業の機能の一つであるフォームを使った実践例を体験し、その効果について実体験を通して学修した。また、スタディ・ログを用いた個別最適な学びの取り組みについても、実践例を通して学修した。

(4) 模擬授業

① 英語科 英語科は模擬授業2回を担当した。1回目は女子学生4名で、導入・文法説明・発音指導・作文指導の4つの場面を分担して、授業を行った。2回目は男子学生1名が率先して授業を行った。

② 国語 国語科は模擬授業2回を担当した。1回目は高校2年の古典B、単元名「『枕草子』「中納言参り給ひて」」の模擬授業で、2回目は中学2年の「読むこと」、単元名「『文殊の知恵』の時代」の模擬授業であった。どちらの回も、50分の代表授業の後、全員で授業研究協議会を行った。

○学生のレポートより

枕草子という難しい古典の単元であったが、机間指導や音読時の巡回を行い、どの生徒にも気を配っていたように思う。また、スライドを活用し、人物紹介や基本事項などを板書する時間を省くことで、

指導を効果的に行っていた。音読の際には、読めない単語には読み仮名を記入するように声掛けをし、生徒が音読時にどのような活動をするよいかの明確に示されていた。一度範読を行ったあとに、本文中の歴史的仮名遣いの解説を行い、全体での音読を行った点は参考にしたいと感じた。また、授業中、生徒の様子をよく観察し、気に掛ける様子がよく見られた。

(5) 保護者・地域との連携を目指して

学校・家庭・地域連携の意義と方向性について考えたうえで、保護者対応（クレーム対応）のロールプレイングを行って、保護者・地域対応について考えることをねらいとした。まず講義を行い、学校・保護者・地域は学校の目的達成、すなわち子どもの教育のために連携協働することを確認した。とくに、近年のコミュニティスクールが教育課程の計画・実施にかかわった事例について動画を用いて理解し、連携協働の実際のあり方について検討した。続いて、保護者連携における教師の心構えとして、子どもにとっては保護者に対する「通訳」となり、保護者にとっては子育ての「パートナー」となる必要があることを理解した。実際の対応には、カウンセリングマインドが必要であることを確認して、保護者からのクレーム場面を想定したロールプレイングを実施した。難しい保護者対応の場면을教師役・保護者役を疑似体験することによって、教師の仕事を務めるにあたっての心構えをつくるきっかけとした。

(6) 学級経営のワークショップ

ほとんどの学生が、4月より新任教諭として赴任する。不安と希望が入り混じった心境であることが想像される。新任教諭として無事にスタートを切るために必要な心構えおよび予備知識を共有した。

また、担任として、学級開きに際しての「学級通信」を作成し、発表を行った。その作業を通して、担任の役割、学級経営などへの理解を深めた。1年次での「生徒の理解」、2年次での「学校教育の体験活動」を踏まえ、これまでの学修の振り返り及び今後の展望を共有する。

○学生のレポートより

小川先生のお話を聞いて、不安だった3月4月の教員のスケジュールや週案や教材研究について知ることができた。特に、どこの学校に赴任するか分かるまでの流れや学級開きについてはあまり想像がつかず分からなかったため、非常に有意義な時間でした。

(7) 道徳教育の理解

道徳教育・道徳授業について、教材研究・授業方法・学習指導案を資料にして、事例的に学修した。まず、中学校第1学年道徳科用教材「選手に選ばれて」（東京書籍）を用いて、教材研究や実際の学級運営上のよくあるトラブル、生徒の心情に関する広く深い理解が、授業展開に影響を及ぼすことを例示し、教材研究やその基礎となる生徒理解の重要性を確認した。次に、文部科学省「道徳教育アーカイブ」所収の中学校第2学年対象の道徳科授業の動画を用いて、パネルディスカッション的活動を取り入れた授業方法について、その可能性と限界・課題について考察した。動画視聴後、3～4人のグループをつくり、授業についての気づきをきっかけに互いに意見交換して、学びを深めた。

(8) 日本の教育が直面する課題

2年次での「学校教育の体験活動」で取り扱った諸課題（「いじめ」、「体罰」、「学習指導要領とは」、「校則とは」など30余りの課題）を総括する。

(9) 私の目指す教師像

2年次での「学校教育の体験活動」で発表した「私の目指す教師像」を振り返り、4年間の学修を通して、それがどのように深化したかを省察する。学生には自らが目指す教師像を「私の目指す教師像」のテーマでレポートを提出させた。

○学生のレポートより（抜粋）

1. 共感力

生徒と向き合う中で生徒と打ち解けるためには共感力が不可欠であると考えている。

2. 授業力

教職は確かな専門的知識を備えていないと成り立たない。授業が上手な先生ほど生徒から慕われると考えるため、授業力を選択した。

3. 教育的愛情

生徒と接する中で、厳しいことを言わなければならない場面も出てくるであろう。その時に、愛情のある指導であれば生徒は受け入れてくれるだろうが、うわべだけの指導ではただ抑圧的態度をとっているように捉えられる可能性もある。そのため、生徒一人ひとりとしっかり向き合い、日頃から様子を観察して、長所を引き出せるような指導を行えるように努めていきたい。

4. 総合的人間力

人間力の中には社会性や忍耐力、責任感などが含まれていて、これは生徒に信頼を与える要素であると強く思う。

5. コミュニケーション能力

校務を潤滑に進める上で、教師間のつながり、さらに言えば保護者や地域との連携は必要不可欠である。相互の信頼を築き上げていくためには、学校内外において積極的なコミュニケーションを図っていくことが重要だと考える。また、生徒との日常的なコミュニケーションは、生徒との関係を良好に保つだけでなく、生徒のささいな異変や悩み等に気付くことに繋がると思うため、自ら行動を起こし、縦にも横にも広いつながりを持った教師を目指したい。

(10) 成果と課題

教育学部中等教育の完成年度を迎えた。1年次「生徒の理解」、2年次「学校教育の体験活動」、3年次「教育実習Ⅳ」、4年次「教育実習Ⅴ・Ⅵ」が相互に関連付けられて教育的効果を発揮することができた。しかし、感染症に大きく影響されて、学外での実習が制限されやや不満な点が残ることは否めない。

今後は教育成果をより精緻に検討して、4年間の学修がより緊密に関連付けられる仕組みを構築するために、より一層の努力が必要である。